

# 備後



毎日新聞 掲載記事(2017年3月18日号26面)  
『在宅』ケアで支えたい  
当法人の職員へのインタビューや、小規模多機能居宅介護に対する思いなどが掲載されております。

## 「在宅」ケアで支えたい

### 老いの人模様

介護の現場から

下

「おはようございます。庭の事情に応じて、短期よく眠れましたか?」。地域福祉センター仁伍(福山市木之庄町)の副主任、田中三千代さん(53)は、早朝から送迎車で市内を駆け回っていた。午前中だけで、センターの通所介護と訪問介護を利用する高齢者宅10軒を回る。訪問介護では、食事を届け、薬を渡して飲んだことを確認し、おしめを交換。「しんどい面もあるけど、利用者さんの顔をみたら元気をもらえます」  
小規模多機能型居宅介護は、利用者の希望や家庭の事情に応じて、送迎や派遣に職員の手が必要な通所や訪問は負担が大きい。宿泊は相対的に、人手がかからないといえる。「泊まりの利用者にも、認知症で家族の手に負えないなど、さまざまな理由があります。でも当事者の多くは、やはり

#### 訪問介護



介護保険で受けられるサービスの一つ。介護福祉士や研修を受けた訪問介護員などが利用者宅を訪問し、1人では難しい入浴や排せつ、食事などの身体介護をするほか、必要に応じて掃除や洗濯、調理などの家事を援助する。社会福祉法人やNPO法人、民間企業などが運営する訪問介護事業所がサービスを提供するほか、近年は住宅型有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅に事務所を併設し、入居者に限定して訪問介護をする事業者もある。

### 地域福祉センター仁伍 希望や事情に臨機応変 副主任の田中三千代さん



自宅で暮らしたいと願っている。地域の中で助け合い、私たちが手助けし、お年寄りは地域で一生を終える。在宅中心に支えることに小規模多機能の存在価値があると思うんです」と田中さんは語る。そう考えるのは、岡山県笠岡市に暮らす母西江マサコさん(81)と、昨年11月に88歳で亡くなった父功さんへの思いからだ。船大工や工場勤めをして引退した功さんは、70歳ごろから脳梗塞で度々倒れ、それまでと様子が一変した。暴力を振るい、暴言を吐く。脳血管性認知症と診断された。同居の弟は仕事のため日中は不在。田中さんは結婚で福山市に移り、既に介護職に就いていた。負担は、病気で視力を失ったマサコさんにかかった。心配して帰省する田中さんも容赦なくののしられ、罵倒される。毎回言い争いになり、憎しみさえわいた。「元気だった頃は、職人かたぎで無口で、私たち姉弟をよく海釣りに連れて行ってくれた優しい父。思い出すと複雑で胸が張り裂けそうだった」。自宅での生活は限界が近いと田中さんは感じたが、功さんには感じしたが、功さんには感じなかった。昨年4月、体調を崩して入院した病室でも、功さんは「家に帰りたい」と泣きながら懇願した。「父の最後の願いをかなえたい」。田中さんが在宅医療や訪問介護の準備をしていた同11月、功さんは息を引き取った。「もう少し早く在宅ケアの決心をしていたら、父は家に帰れたのに。悔いが残って涙が止まりませんでした」

利用者に優しく話しかける田中さん

今はセンターの仕事の傍ら、実家のマサコさんをいたわる。家族にも仕事にも、同じ後悔は二度としたくないと誓う。「お年寄り向き合うと、常に両親と重なります。できるだけ、希望をかなえながら、幸せな生活を送ってもらえるように、私たちも頑張っていかなければなりません」  
(この連載は目野創が担当しました)